統一

第百五十七號

明治四十一年三月十五日（毎月一回十五日）發行

目次

佛陀觀に就いて　本多日生
自我偈講話（一）　關田養叔
大國民の資格を造れ（其二）　清瀬貞雄
摩訶般涅槃管見（承前）　森川蘊山
予が信仰の回顧を述べて宗信の友の返翰に代ゆ　南山子
金澤教界革新の曙光　樂本子
天眞獨朗
宗務應錄事
雜報
教學財團公告

佛陀觀に就いて

（早稻田日蓮研究會第六回講演）

本多日生

1、序言——2、哲學面には眞理の体現者——3、宗教面には慈悲の濟度者——4、倫理面には三德の大恩主——5、文學面には蓮華の仲相身

1、序言

佛陀に對する思想信仰を講明致しますするは、決して古代亞細亞の一隅に起りて、沙羅一片の煙と消へ去りし一沙門の事跡を追究する史的問題ではありませぬ、實に古今東西に亘りて、吾人の心靈界に潑溂たる生氣を有し、現に生々たる人類の欲求に答ふる所の光明と活力とを有して居る大問題であります、吾人の心靈上に滿足を與ふるものは、求智の欲望を滿たす哲學的の眞理と、生存の欲求を滿たす宗教的の信仰と、良心の承認を得る倫理的の善德と、美的の感情を滿たす文學的の趣味とは、その最も有力にして且崇高なるものでありますが、佛陀の有し給へる光明は、この心靈上に於ける全般の欲求を滿たす完成者であつて、即ち哲學面より望めば、眞理の体現者として尊敬すべく、宗教面より仰げば、慈悲の濟度者として信頼すべく、倫理面より窺へば、善德の大恩主として拜跪すべく、文學面より拜すれば、文中王として微妙の淨相天人倶に讃仰すべき所、斯くの如くに各方面に亘りて、吾人の心靈上に於ける全般の欲求を滿足せしむる完成の意義を有して居るのであります

今はこれ等の各方面に就いて、その概要を辨じて、佛陀聖德の一斑を御紹介する考であります、その立證は、法華經と日蓮上人の聖判とに依ることに致します

2、哲學的基礎（法佛不二說 生身即法身觀 統一的佛身說）

佛陀觀の哲學的基礎を辯明するには、少なくとも法佛不二の說と、生身即法身の說と、統一的佛陀觀とを闡明する必要があります

初めに法佛不二の說に就いて辯じますれば、佛教の法理を小乘、權大乘、法華經の三種に分かつことが出來

るのであります、小乘教にては、宇宙の現象に對して實在性を認めず、即ち諸法は無我である、諸行は無常であると申して、理象の不確實を說き、遂に之を空と云ふので、折破して後に空と見る折空觀と、體體のまゝ即空と見る体空觀との別はありましても、畢竟現象の實在を否定するのであつて、又りの本体に對する考は甚だ不透明であります、されどこの現象の境界を超越した所に、何等かの實在性があると思ふて居るので、非想非々想と云ふ風に思想をも超越したる絕對の上に實在を理想したのでありますけれども、その實在觀念が甚だ鮮明を缺いて居るのであります、斯く現象は無常と見て、本体の實在は茫乎として認めて居るから、斯かる法理の上に見たる佛陀は、矢張現身は無常の身、生滅の身と思ひ、而してりの佛の本体は漠然として無餘涅槃に入りて長へに不滅なるべしと信じたので、是れが三藏教の劣應身佛と、通教の勝應身佛とであつて、折空体空の法理に對する法佛不二說である

權大乘教にては、宇宙の現象は假定的に存在するも生滅のものと認め、その本体は眞如の理体であつて全く不變なりと見、この本体を認むることが大に進んで來た、然れどもこの本体不滅の眞如と、現象假立の諸法とが、隔絕して二者融即の理を立てない、論つて斯かる法理の上より見たる佛陀は、その現身は假立の應身であつて生滅を免がれぬが、その法身は實在の眞身であつて不滅の佛陀であるとなし、法身觀が餘程分明になつたけれども、現身佛と法身佛とが隔絕して、前者は劣り後者は勝ぐると思ふて居たのである、この權大乘教の事（現象の諸法）理（眞如の体）隔絕の法理觀と現身法身隔絕の佛陀觀との一致が權大乘の法佛不二說である

實大乘の法華經にては、宇宙の現象たる諸法と、その本体たる眞如とは、全然不二であつて、現象の外に本体を求めない、現象の上に即本体を見るのである、それは現象は生滅の如く見ゆるも一面觀であり、又同時に不滅常住と見ゆるが實相である、如にあらず異にあらずと說いて、差別自在事理不二等の妙義が示されてある、法華經の方便品に諸法の實相を說いて世間相常住と云ひ、斯くて提婆品に佛身を歎じて、微妙の淨き法身、相を具する三十二と云へるは、即ち法理上の事理不二說が、直ちに佛身觀の具相即法身の思想と一致するので、こゝに法華經の法佛不二說は成立つのである

この實相觀が鮮明に進むと、十界常住論となつて、衆生の佛性の實在と、佛陀の果成の實在とが、俱に故にあらず新にあらずして、九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に備はりて、十界互具し十界俱に實在者であつて、隨つて佛陀の本体と顯現とに就いても、体用不二なることを會得し、應用の生身即本体の法身であり、且その法身は無相の法身とか普遍の法身とかに流れずして、具相の法身と菩位中心のある法身とが明白になるのである

壽量品に我實成佛と說いて、具体的法身の常住を示し、開目抄に報應顯本と說いて、菩位中心の釋尊を示めせる所が特に光輝ある教義となつて居るのである

次に生身即法身の說を辯じますれば、前來說くが如くに、法華經已下の權教にては、生身の佛陀と法身の佛陀とが隔絕して、生身の相對身が即法身絕對の佛陀なることを認めないのである、こゝに佛陀觀の一大不備が横はつて居るために、釋尊を生身佛として輕ろしめ、他に別に彌陀報身の佛とか、大日法身の佛とかが、勝ぐれて在るやうに思ふたので、この思想は小乘の佛身觀よりも、却つて軌道を逸して居るのである

生身の佛陀の上に即法身の佛陀を認むるの思想信仰は佛教々義の他教に異なる大なる光彩であつて、大乘涅槃經に「如來世尊は、眞の父母あり父を淨飯と名づけ母を摩耶と名づく、而かも諸の衆生猶ほ是れ幻なりと言ふ、云何んぞ當に化生の身を受くべけんや」と說いてあるが、生身幻影の思想は斯く排斥してあるので、今の釋迦牟尼佛が人類に降誕し給ひしは、不可見普遍の法身にては吾人凡夫何に依りてか出離の緣を求め得ん、現に吾人の前に歷々として人身を示めし、人の子として絕對の智悲を發射し給ふ、されば法身を他に求

むること勿かれ、この父母の生身に於て即微妙の法身全躰を備へたることは、恰も衆生の當体の他に佛を求むれば、厭離斷九の迷想なるが如く、生身の佛陀の外に法身を求むるは、三身隔歴の迷執である

先師本國寺日遠上人の決膜明眼論に、この間の妙旨を結束せり、好參考と思ふ

妙樂疏記一に云く　若し法華已前は、三佛離して明す、偏小を隔つるが故に、此の經に來至して、劣に從へて勝を辨ず、三に即して而も一なり、と

是れ則ち法華已前は三佛離して明す、離して明すを以ての故に、報應二身に其の優劣を明して、毘盧は色頂に在て、應化は樹下に坐すと云ふ、今經に來至して劣に從へて勝を辨ず、釋迦即是れ毘盧遮那なり故に

序分無量義經に云く　大なる哉、大悟大聖主乃至出にあらず、沒にあらず、生滅にあらず、示して丈六紫金の暉を爲す、と

山家の注釋に云く　四八の相に約して内證の身を歎ず、示爲丈六紫金暉とは紫金法身の躰を歎ず

正宗法華に云く　微妙の淨き法身、相を具する三十二なり、八十種好を以て用て法身を莊嚴せり

結經普賢觀に云く　釋迦牟尼佛を毘盧遮那遍一切處と名け、其の佛の住處を常寂光と名く

大涅槃經第四に云く　我が今此の身は即是れ法身なり、無量劫より來た久しく妄法を離る、是の如き身は即是れ法身なり

輔行第八に云く　勝より劣を起すは即是れ施權なり劣より勝を起すは即是れ開權なり、其の相云何ん、化應の如きは自ら說いて、吾が今此の身は即是れ法身なりと、況んや是れ報ならざらんや、即ち是れ法華の序正結始終一貫して、開權の眞佛は應即法身なるを方に今經の敎主と爲す

天台妙疏三に云く　若し丈六の佛即毘盧遮那法身にして光を放つは圓の義なり

是を以て法華の佛は、則ち境本定身丈六應身なり、此の丈六に即して法身如來なるを方に敎主と爲す、

佛既に應即法身なり、故に所居の土も亦娑婆即寂光なり、故に經に云く、其の佛の住處を常寂光と名くと、妙樂記の九に云く、我が土は毀れず、常に靈山に在り、豐伽耶を離れて別に寂光を求めんや、寂光の外に娑婆あるにあらず、又云く、直に此の土を觀ずるに四土具足す、故に此の佛身即三身なりと、

空海が眞言の法應優劣の談は、正しく是れ權說にして、三身相即の旨を隱覆するに由るを知らず、却つて法應優劣の說を將ひて顯密の勝劣を判じ、大に法華華嚴を誹謗す、寧ろ邪見にあらずや（卷三ノ三八巳下）

巳上の經釋を見れば、生身即法身の關係極めて明白なりと思ふ、壽量品に、今の釋迦牟尼佛を擧げて、眞に久遠實成を光顯せる所、聖祖の、諸大乘敎に破さゞる伽耶始成を破ぶりたる五百塵點なりとの妙判、これ等に就いて靜思致しますれば、生法不二の妙旨は、大体に於て會得することが出來ると思ふ

次に統一的の佛陀觀に就いて辯じますれば、法身平等の意趣に於て無名の佛陀を統一身となすの思想は、權大乘の敎義となつて居りますが、諸佛と釋尊との關係を、單に無名の法身の上に將ち行きて、平等を見るが如きは、全く佛敎の實歸ではありませぬ、佛敎の正系を子細に考察致しますれば、小乘に於ては、時間的の中心を釋尊に取りて、思想信仰の統一を計りたるものである、過去に七佛あり、未來に彌勒の出世あるも、過去は去つて今見奉らず、未來は遙遠にしてその曉を知らず、故に現に釋尊及遺法を尊敬して出離の善緣となさしむるのである、阿含部の信佛功德經に云ふ

舍利弗の言く、我れ佛に從ひ上つて聞いて記念し受持す、二佛并んで世に出づること有ること無し、唯佛世尊は是れ眞正等正覺なり、是れ正徧智者にして最上の神通の力を具足し給ふ

この文を見れば、二佛並出を否定し、而かも今の釋尊は、眞理を躰達せる正徧智者であつて、智惠に飽くる所なく、又神通佛力に於ても最上にして飽くる所がない、即ち他の力を求むる必要なしとて滿足を謳歌せるので、是れ時間的に統一的信仰を示せるものである

權大乘に於ては、空間的の中心を釋尊に取りて、ひとに思想信仰の統一を維持せしめたものである、十方に諸佛同時に存在することを許すも、而かもこの土の我等のために渇仰の對象たるべきは、正しくこの土の教主釋尊であつて、決して二佛並立を許さぬ、大乘涅槃經に云ふ

一國土の中に二轉輪王、一世界中に二佛出世すとは、是の處り有ること無けん

この文は十方有佛を許すも、而かも一化境の世界に二佛の出世を許さぬ、二佛の出世を許さぬは、渇仰信仰の對象が紛亂して、統一の信仰を維持することが出來ず、衆生濟度の妨害となり、佛出現の唯一の目的を失却する故に、勢くは規定せられたのである

この小乘の時間的中心と、權大乘の空間的中心との思想を擴大する時は、こゝに時間空間を貫いて三世盡十方の統一の中心が定まつて來るのである、この主意を示せるが法華經であります、小乘權大乘の中心は、化緣の上より見たのであるが、今法華經は、實質的に解決してあるので、根本的に統一の本主を示されて居る、時間としては無始久遠を說き、空間としては盡十方を舉げ、而して時間の中心をば今番の出世に取り、空間の中心をば此の娑婆世界に取り、而して生身即法身の主意に於て、諸佛應現の本質中心を今の釋迦佛に飯し給ゐたのである、經に、名字の不同年紀の大小を說くも、若今の釋尊の化用なることを明し、聖祖は開目抄に、平等意趣にも似ず、この過去當顯はるゝ時、諸佛皆釋尊の分身なり、と喝破し給ゐぬ、この經判を最高指針として、全佛教を達觀致しますれば、權大乘に空間的の中心を釋尊に取りしも、小乘に時間的の中心を釋尊に取りしも、畢竟釋尊に對して信仰を專注せしむるの主意に外ならぬので、彼の諸佛と釋尊との關係を法身平等の上に統一するも、飯着は化緣の上より釋尊を中心に定めたるものであるが、今法華經は、この化緣の中心を時空兩面より見たる上に、本質的に統一の意義を明かにしたのである、斯く化緣の上よりも、本質の上よりも、必らず統一の本主を釋迦牟尼佛に取るに於て終始一貫して居るのが、佛教の正系であつて、法華經は實にこの佛教の正系を明晰に發揮したる妙典であります（斯稿次續）

自我偈講話（第一回）

佛城關田養叔講話

序說

法華宗の信心をするものて、何人ても常に讀む所の御經といへば、言ふまてもなく、方便品と自我偈てありますが、然し僅少なりとも其の意味を辨へて讀む者は極めて稀れな樣てある、是れは誠に殘念なことゝ思ふのてあります、

『世界の草木を筆と爲し大海を硯と爲すとも法華經の功德は說き盡し難し』と、日蓮大聖人も仰せられてある程てあるから、元より經文の意味を悉く知るといふことは出來るものてないけれども、少しても經文の意味を知つて讀むのと知らずに讀むのとは、信心を致す上に於て、非常な相違があると思ふ、

經文には讀誦の功德といふて、意味も知らずに讀むても、自づと功德は有るけれども、意味を少しも辨へずに讀むて居るときは、信力の上に退轉といふて、後戻りをする恐れがある、此の後戻りと云ふ奴は、信心の上に息氣を生じたので、即ち信力增進を妨げる惡魔てあります、此の惡魔に附かれた信心は、功德の無い無駄信心となつて了ふ、夫れてあるから、經文の一偈一句を讀む間にも、嗚呼有り難いと云ふ觀念が無ければなりません、此の『嗚呼有り難い』と言ふ觀念といふものは、何にから出て來るかといへば、解了といふて、少しても意味か解るといふ所から出て來るのてあります、妙樂大師か、『經文を讀むて一句たりとも、嗚呼有り難い哉、尊い哉と魂に染み込めば、即ち成佛の助となるぞと』　申されてありますが、經文を讀むて此の『魂に染み込む』と云ふことが、第一番に肝心てあります、

昔し比叡山に或る大學者て信心の深い御方があつ

たが、自我偈を讀む度毎に、感じ入つて有難涙を溢したといふことでありますが、何卒皆さんに有難涙を溢ぼして貰いたいと云ふ譯ではないが、御互に一生涯の間には、自我偈を何千遍乃至何萬卷といふ程讀むのであるから、一向理義が解からずに讀まないで、經文の魂のあるところを少しにても會得して、自我得佛來……億載阿僧祇と讀むだ時には、久遠の本佛大恩教主釋迦牟尼如來は常に此の世に在し給ふ、吾が現前に在し給ふと思ふて、讀み、我此土安穩天人常充滿……と讀みし時は、佛陀の御悟りの境界の如何にも尊く如何にも有難きを思ひ、放逸貪五欲……と讀むだ時には、我等凡夫どもの境界の淺ましく又恐るべきことを思ふと云ふ樣に心得て、經文を讀む度毎に、信力を勵まし安心決定の資糧を得る樣になりたいと思ふのであります、

佛陀の說教は、八萬四千の法門、七千卷の經文といふ位て、實に廣大無邊なものでありますが、畢竟るところ何を敎へたものであるかと言へば、六かしい理屈を並べたならば、澤山あるだらうけれども、先づ、人間一生涯の身の振り方を敎へ、心の落ち附き處を示されたものであると言ふに歸着する、

それて是れより、皆さんが朝に晩に御讀みなされるところの、自我偈の講話を致しますに就いても、學問上の六づかしい理屈は成るべく避けて、極めて平易しく自我偈の一句一句を講義して、而して經文の意味を能く味ふて、自分も他も共に、法華の信力を增進し經文の指導に依つて、日々夜々に身の振り方を知り、心の歸着を得たいと思ふのであります、

自我偈と云ふは、法華經第十六番目の如來壽量品の結末の方に於て說いてある所の、僅に二十五行半、五百十字と言ふ文字から成り立つて居る經文で、壽量品の妙義說法を、更に偈と云ふものを以て、詮じ約めて說いたのであります、

日蓮大聖人の御文章の中に、『一切經の中に壽量品在さずば、天に日月なく、山河に珠なく、國に大王なきが如し』とあつて、壽量品は、天に日月があつて暗

夜を照すが如く、山や河に珠あつて、諸の財寶を出すが如く、國に王樣があつて世の中を無事太平に治めて行く樣に、一切經の中の日月であり、財寶であり、王樣であるのです、若しも、一切經の中に壽量品が無ければ、全然一切經は反古紙同樣になつて了ふのであります、それであるから、日蓮大聖人は又『壽量品なくば一切經いたづらごとなるべし』とも仰せられてある

壽量品が一切經の中に於て、何故に斯の樣に大切であるかと云ふと、此の品に於て、我れ等を救ひ給ふ眞實の本佛も顯はれ、本佛の大慈大悲も顯はれ、末法今日の時に於て、我等衆生が、成佛の大利益を得るところの、三大秘法事の一念三千の妙法も說き顯はされてあるからである、若し此の壽量品が、一代佛敎の中に、說かれて無つたならば、我等凡夫は、永く彌陀如來や、藥師佛や、大日如來の如き、夢の樣な幻の樣な捉へどころもなき權佛に迷ふて了ふて、久遠の本佛の救濟と大慈大悲とを蒙むることは出來ないのは勿論、百千萬劫にも値ひ奉り難き妙法五字の光明に照らされることも出來ないのであります、

されば、日蓮大聖人が、建長五年四月廿八日、一乘法華の妙宗を開き給ひてより、四箇の大難、無量の小難を忍び給ひ、弘安五年十月十三日、御歲六十一歲にして、池上に於て御入滅遊ばさるゝの時、四方より潮の如くに集り來れる弟子檀越に對する最後の敎誡にも、『壽量品顯れずんば、尙ほ斯れ未顯眞實なり』と仰せられてあつて、若しも壽量品が顯れなかつたならば一切經はをろかな事、法華經と雖、眞實の經とは言はれないと仰せられたのであります、

斯る尊き、一切經の中の日月、一切經の中の財寶一切經の中の大王、一切經の中の眞實經たる、

壽量品の肝要を取つたのが自我偈

であります、夫れ故に、此の自我偈は又、取りも直さず、一切經の中の最も大切な最も肝心な經文と申さねばなりません、御妙判の中にも『夫れ法華經は、一代聖敎の骨髓なり、自我偈は法華經二十八品の魂魄なり、三世の諸佛は壽量品を命と爲し、十方の諸佛は自我偈

を眼目となす』とあります、畳、有り難き經文ではありませんか、

『自我偈』を、亦は『久遠偈』とも申しますが、先づ此の自我偈の三字の中で

偈

と云ふ字から御話しいたしませう、

總じて、御經の中には、長行と偈と云ふことがある、長行とは、長は長いと云ふ字、行は一行二行の行の字で文字の繋つて居る意味で、此の長行といふことを、壽量品の中で申せば、爾時佛告諸菩薩……と言ふ樣に續いて居る文字の句切りか、四字とか五字とかに定まつて居ないで、五字で切れることもあり八字あることもあると云ふ樣なのを申すのです、夫れですから、爾時佛告諸菩薩より欲重宣此義而說偈言までを、壽量品の長行と稱して居ります、それから此の偈といふのは、初めより終りまで、四字とか五字とか、一句一句に、句が切れて居るのを云ふのです、即ち自我得佛來――所經諸劫數――無量百千萬……と云ふ樣なのは、句が五字づゝで切れて居ります、元來、この偈と云ふは、日本や支那の語ではない、梵語即ち天竺の談で詳しくいへば、偈陀または伽陀と云ふので、東土の語に譯して見れば、『頌』といふのです、頌と云ふは、『ほめる』又は『ほめことば』と云ふ意味で、字數の定まつた美しき句を以て讃め謠ふ意味、今日で申せば、學校で歌ふ唱歌の如きものであります、今の壽量品でいへば、此の品の上の長行に於て、說かれたことを、更に再び、此の自我偈で、美い花麗な文句を聯ねて讃め歌ふたのであります、次に此の壽量品の偈を、

自我偈と名けたる理由

は、偈の最初に、自我得佛來――とあるが、此の讀み初めの『自我』の二字を取つて、自我偈と云ふ迄で、別に深い意味は無い、丁度論說の初めに『學而時に之を習ふ』とある、『學而』の二字を取つて、『學而第一』といふた樣なものです、

先きに一寸申して置きました此の自我偈を

久遠偈と稱る理由

は、これは、壽量品の經文の意味から名を附けたので、詳しく申したならば、久遠實成偈と申すべきであります、『久遠』とは、『久』は久い『遠』は遠いと云ふ字で、量り知ることも出來ない大昔といふこと、『實』は眞實、虛妄でない「まこと」といふこと、『成』は成佛で、佛に成ることです、壽量品に於て、釋迦牟尼佛は、天竺の淨飯大王の皇太子と生れて、其れが急に發心して佛陀に爲つたと云ふ樣な、近頃の新らしい佛ではない、久遠の太書に眞實に成佛して居つた本佛であるといふことが說いてある、此れらの意味から取つて、久遠偈と申すのであります、

寄書欄

大國民の資格を造れ（二）

清瀨貞雄

三、道德的の宗敎を撰べ

宗敎の世を濟ひ、人を利する所以のものは其要素の一として道德的意義の存在するものあればなり、然れども世の所謂る道德なるものは、時代の變遷と俱に變遷し、世運の推移と共に推移せり、曰く野蠻時代の道德、半開時代の道德、曰く西洋の道德、東洋の道德、社會の道德、土地の道德、習慣の道德、曰く何に、曰く何にと、何んぞ夫れ世の道德の名の煩多なる斯くの如くなるや。

抑も道德なるものは時代と共に變遷するもの乎、東西の異別なると共に道德にも異別を生するものなる乎、然り、變遷もあり異別も生すべし、然れども變遷あり異別を爲すが如き道德は、名は道德なりと雖も眞の道德たるを得さるなり、詳言せば斯くの如き道德は則ち部分の道德なり、技葉の道德なり、肉の道德なり、低き意味の道德なり、之を强ひて名けて、野蠻時代の道德、文明の道德、西洋の道德、東洋の道德等と稱するものにあらずや。

凡そ人間にして萬物の長として自ら其靈たるを任ずるものは何んぞや、これ謂ふまでもなく、人の道なるものは新古を問はず、東西に拘はらず、終始一貫して人道なるもの存在し得ればなり、人道とは何んぞや人道は人道なり、禽獸の道にもあらず、餓鬼の道にも

あらず、修羅道にもあらざるなり、修羅は鬪爭に生活し、餓鬼は苦慾に生活し、禽獸は殘害に生活しつゝあるにあらずや、而して人間の生活は如何、人間の生活は當然人道を歩み行くの生活なり、人道を歩むの生活とは如何なる意義の生活なりやと云はば曰く、これ則ち智德行使の生活なり、智德行使の生活とは曰く、智識を以て德義を律し、德義を以て智識の規する所を實踐するの生活を云ふなり、元來吾人は何んの爲めに人間として存在しつゝありや、又存在を要するものなりやと云ばゝ實に吾人は智德行使の爲めに生れ、智德行使の爲めに働き、智德行使の爲めに棺を蓋ふものたり、人世の目的實に茲に存せりと謂ふべし。

然れども今や世間の生活狀態を見よ、大に然らざるものあり、嗚呼、人生の目的たる智德行使の實は今將た何處に在りやを疑はしむるものこれ今日の世間の狀態ならずや、彼れ瑞西の經濟學者シスモンジ、絶叫して曰く、『然らば問はむ富は萬能にして人間は一文の價値なきか』、又曰く『經濟學者は一にも曰く富、二にも曰く富と、其言や可し然れども抑も之を何に者の爲めにせんと欲するか』と、これ世の經濟學者の多くに於て見るところの宿弊を切言したるものと謂ふべし。

學者にして猶この誤解に陷れるものあり、今の世の汝々たる俗物、憒々たる小材子、人生の目的たる智德行使の實踐をれ忘去りて、『眼中唯金』これを過重視し、金錢の一方に狂奔し、煩悶して熄まざるに至るは蓋し異しむに足らざるなり。

抑も道德の基礎なるものは之を何れに索むるやを研究せば、須らく之を宗敎の淵源に索むべきものなることを領得するならん、若し夫れ之を索めて得ざるの宗敎は、宗敎として殆んど價値もなく資格もなきものなり、彼の天然的宗敎、動物的宗敎等の多くの迷信的宗敎なるものは皆道德的宗敎にあらず、再言せば天然的宗敎は道德的宗敎と背馳せり、動物的宗敎は非道德の崇拜なり、迷信的宗敎は凡べて道德を破るの信仰なり、孟子言はずや、『悉く書を信せば書なきに若かず』と、蓋しこれ怪行俗書の世を害するの大なるを切言したるなりき、今余をして更に言はしめよ、曰く、悉く宗敎を信せば宗敎なきに如かずと、これ吾人が妖敎迷信の世を荼毒するの甚しきを憂えてなり、偶、論者あり、佛敎を評して曰く、佛敎は非道德にあらず、無道德なりと、其意蓋し佛敎は出家主義なり、山林主義なり、消極主義なりとして、是にも非にも佛敎に於ては道德なるも

のゝ意義は更にこれ無しと言ふにあるものゝ如し、これ豈自己の淺見を表白せるものにあらずや、

知らずや、佛敎に於ては技末善あり、根本善あり、相對の道德あり、絶對の道德あることを、而して道德の最上、最上の最上乘なる究竟道に名けて絶對善、若くは絶對道德と謂ふなり、彼の西洋の道德、東洋の道德、野蠻の道德、文明の道德と云へる如きの變遷推移ある道德の如きは皆これ、佛敎の所謂る相對道德中の一部分の道德たるに過ぎざるものなり、時と處とに拘はらず人道は人道として不變的に存在するものあり、之を佛敎の所謂る相對道德の本位と謂ふ、而してこの相對道德の本位は則ち、絶對道德の域に進行せんとする好關門なり、向上律の好線路なり、この關門と線路とは吾人人間として必ず通過すべきもの、又尊重すべきものたることを佛陀は吾人に敎諭したりしなり、戒法門鈔に『此五戒（殺生、偷盗、邪婬、妄語、飲酒、儒敎の仁義禮智信なり）若し破れつれば一切の諸戒皆破る、五戒は破ると雖も大乘戒は持ちたりと云ふことはこれなし』と、これ則ち吾人が人間として人道を歩み行く上に於て實に欠くべからざる敎訓ならずや、獻異鈔に「信心の行者には罪惡も、業報を感ずること能はず、諸善も及ぶことなし』と然り、然れどもこれ絶對の域に優遊するものゝ言なり、吾人が人間として相對の範圍に屈蹲し、進退せるを得ざる間は、人間の本位、相對上の人道を輕んじて直に、絶對道に超越し其高きを誇ることを得す、獨り獻異鈔の感化を受け得たる眞宗門徒に於てこの弊を見るのみならず、本化門下の信徒に於ても往々この大弊あることを實見せり、則ち彼れ誤解せる信者等は以爲く、我れ等は法華經の行者なり、本門の妙旨を信ずるものなり、口に題目を唱へ御經を讀むものなり、而して廣分の世話も外護をも爲すものなり、五戒を破りて狂言綺語、妄語惡口を爲すとも、これ等の世間罪、人道罪にては、業報も得、身邊に來らず、罪業も消滅して成佛するに礙げなけんと誤信して、世間の道德則ち人道の實踐を輕々に看過するの弊あるを見る、この空腹高心の法華信者をして、上に示せる聖祖の戒法門鈔を拜見せしめば、喫驚數番慙憤愧死するならん、斯くの如きの輩は、常識なき信者か或は常識を失したる僧侶の敎化を受けたる結果に於て往々實見するところなり、加樣なる輩は其者自身の不幸なるは勿論、其者の奉ずる敎義則ち、吾本化門下の敎義に大なる疵を附け、躰面を毀損して、吾敎義に迷惑

を掛けること少からざるなり、これ則ち上に論ずるところの念佛の行者以上に、我法華の行者に於ても誤解者あるが爲めなり。

若し夫れ吾人が人間として現實界に處するに當り、人間當位の道德を無視して、徒らに高きものを而已捉らへんとするが如きは、道德的宗敎の與みせざる所なり、斯くの如き空腹高心の輩は單り人道の罪人のみならず抑も亦絕對道の罪人なり。

惟ふに宗敎として世間道に對するの立脚は、道德的宗敎にあらずんば、其存在を永久に認むる能はず、否、存在するの必要なきなり。

我聖祖は世間道と出世間道との調和整足を法華敎義の中心より取り、圓滿に其緩急の度を敎え以て信仰の旨歸を確實にしたりき、世に廣く迷信せらるる彼の天然的宗敎や、又彼の寂滅主義の宗敎は、今日宗敎として信仰し採用するの價値なし、宗敎要素の一として撰擇すべきものは必ず道德的宗敎なることを輕視すべからず。

四、國家的の宗敎を撰べ

國家の成敗興亡は權者の頭腦に藏する乎、兵馬倥偬の產物なる乎、然り、國家の進步は犧牲史の發達なり、國家の屈伸は干戈的政治史の尺蠖なりと、然れども是れ唯一面の見のみ、皮想の見のみ、思想は根本なり、干戈は末なり、精神は主なり、兵馬は從なりと謂ふべし。

試に根本たるこの思想なるものが、如何に强烈なる勢を以て、現實上に醱酵し來れるものかを實例に徵して見よ、彼のマホメット、の號令を見よ、『コーラン乎、年貢乎、將た劍乎』と彼れは秋霜烈日の如き强き精神を以て基督敎國民に當りしなり、當時基督敎國は柔懦風を爲し、腐敗俗を爲したるなり、彼れマホメットの劍は其空隙を衝き驀然として基督敎國へ闖入せりき、この時に當りては最早、サラセン、民族が鐵と血とを以て宣傳したる『世界唯一神』の呼聲の如きは、殆んど空谷の跫音に等しき觀を呈せりしと云ふ、亦以て思想宣傳力の如何に速かにして且强大なるかを知るに足るべし、今や國家問題は吾人の重要問題として注意怠るべからず、然り、然れども余の見る所を以てすれば從來宗敎家は兎角、この國家問題を甚だ輕視するの傾向あり、實にこれ宜しからざることにして國家の大に警誡すべきことなりと謂ふべし。

抑も國家を覆へし、社稷を危ふするものは何んぞや、

曰く、武器にあらず、山河にあらず、亦氣候にもあらず、國家を危險に誘ふものは、國家觀に於ける根本的思想の鄕導是れなりと言はずんばあらず、この人心思想を感化し國家をして玆に至らしむるものは何んぞやと言はゞ則ち宗敎是れなりとす、若しこの危險なる思想を養成し宣傳する宗敎あらば、其危險なる思想は國中に瀰蔓し、國民の精神に感染して國家は漸く危からん、『神に背ける國家は滅亡するも可なり』と加樣の精神思想は彼等神を信ずる者の精神思想となり、更に現實して露探となり賣國奴となる、國家たるもの豈屛戸に綢繆せざるべけんや、見よ、世に社會主義を唱ふるものあり、個人主義を唱ふるものあるを、社會主義は元來國家を非常に淺小のものとし甚だ輕るきものとして曰く、國家てふものは唯人力の上に立ちたる政權の約束作用のみ、人間の福祉を增進し圓滿ならしむる社會平等主義に優れるものなしと、個人主義も亦國家を甚だ輕きものに視たりしなり、彼等は曰く、國家なるものは唯水陸の區畫、山川の形勢に依りて分立したるものに過きず、自己の利益、自己の都合好き爲めとあらば、米國へ移住するも可なり、獨逸にても佳し、淸國乃至露國にても不可なし、國家の如きは自已を利する爲めなれば何時移住しても可なるものなりとせり、一は宗敎家中に按外勢力ある議論にして、他は利已連に歡迎せらるゝ議論なり、斯くの如きの主義思想は我日本帝國と全然相容れず、我建國の大本は實に國家主義の醇乎として醇なるものなり、絕對的國家主義に立脚したるものなり、特種の國體の下に生存せる日本國民たるものゝ國家の成立後に出てたる日本臣民は彼此言ふの權利なし、宜しく赤誠を全傾して國家の自衞に努め亦餘念なかるべし。

勿論、佛敎は平等の方面より觀れば普徧性のものなり然り全く普徧性なり、然れども其普徧平等の中に於て自ら差別門を開き敎ゑて、世の中の秩序を保たしめたるなり、則ち甲の國家となり、乙の國家となり、君臣の義となり、主從の序となるに至れり、既に君臣あるが故に君臣の分を說き、國家あるが故に國家の秩序を敎へぬ、臣は以て君に忠たるべく、民は以て皇に順なるべく、君は以て臣を撫すべく、皇は以て民を治むべきの道を說き示したるなり、斯の道理に依りて甲の國家に生れたる因緣を有せば以て甲の國家に殉すべく、乙の國家に臣民たるの因緣あらば以て乙の國家と共にすべし、所謂る彌次郎兵衞の子と生るれば其彌次郎兵

術に孝行を爲すべく、喜多八の子と生るれば亦其恩を喜多八に報ゆべき、因緣約束を守るべきことを敎ゆたるものなり、

然るに佛敎家中猶多く平等慈悲の一面にのみ立籠りて差別門を開かず、以て國家を輕視し蔑視して終には怖るべき亡國思想を養成するに至れるなり、獨り彼れ權門思想の輩のみにあらず、國家擁護の中堅に立てる本化の門下にありても猶この誤解者あるを見る、宗敎は社會に處して國家に屬せざるものなりと云へる彼れ隻眼者は曰く、宗敎にして國家主義を主張し又は贊同するはこれ國家に阿ねるものなり、皇室に媚るものなり布敎策の爲めなりと、言ふことを止めよ、吾人は主義の上より國家主義を主張せり、國家を護るべく、皇室を護るべきの道を有して其道を主張せり、豈國家に阿るの要あらんや、豈皇室に媚るの要あらんや。

佛敎を平等にして普徧性的のもの而已と見るはこれ體道の一方面より見たるなり、勿論この體道の方面より云へは平等慈悲なるべく、差別偏頗の見なきなり、然れども差別門を開して用道を採らざるを得ざる塲合多し、見よ、體道の如きは佛敎の自性にして動かざるものなり、其實際の應用に至りては多く差別門に依らざるべからず、用道の働きに待たざるべからず、されば この體道と用道との關係連鎖を誤らずして佛敎を活用すべきなり、然るに唯躰道の一方面より見て平等主義を主張し、國家と國家との關係を無視し、若しくは君臣上下の因緣を輕視して、國家の秩序を紊亂し、名分を沒却するが如きは誤解の甚しきものと謂ふべし。

吾本化門下の議論の潮流を見るに、今より十四五年前より玆二三年前までは、誰れも彼も國家主義々々々と、『國家主義ならでは夜が明けぬ』と迄に流行して猫も杓子も國家主義を言論にも文筆にも訴へし程なりき、然るに近頃其反動に依れるものか、頻りにこの國家主義を破壞するの言論を見るに至れり、これ又一種流行物の觀を呈せり、豈輕躁浮薄の論士ならずや。

彼等躰用の關係を昔より誤れる爾前徒は止むを得ずとするも、吾本化門下の敎徒として猶且この關係を明かにせず、國家主義を破壞するが如きものは、これ本化の主義を提げて社會主義に降參したるものなり、これ偶本化の敎義を巧に應用せんと欲して、却て濫用の弊に陷るものと謂ふべし、敎祖日蓮の肺肝を拜するに何れも々々、躰用の關係を明かにして、用道門を開示せられたりき、敎祖の敎えにして未だ曾て國家觀を二三

にし今日の流行論者の如きものあるを見ず、本化主義の國家觀は日蓮の遺書到るところに躍然として在れり一句短句を玆に引證するの要なきなり。

社會の民人を救ふに當り、貴賤上下老若男女に對して饒益するの道は、躰道に離れず、終始躰道に連鎖し來りて、社會の上中下に用道を應用せば何んの不可かあらん、況んや國家をや、況んや日本の國家をや、日本の國家は絶待の國家なり、社會主義の觀るが如き輕小なる國家にあらず、大なる特種の國家なり、されば この絶待の國家を擁護して國民の福利を計り、秩序整然たる道あり序ある君子國と爲して以て君臣上下の幸福を企圖するを至當の道と信ずるなり。

然れども其用道門より見れば、善あり惡あり、甲あり乙あるべし、善は以て稱揚すべく、惡は以て懲戒すべし、これ時として戰爭をも避けざる所以なり、平等眼より何かに論ずるとも、暴横彼れにあれば我れ之を懲戒せざるを得ず、邪惡彼れにあればなり、邪惡彼れにあらば正義は彼れに與みせず、正義我れにあれば正義は我れに與みす、恐らくこの道には天も與みし地も與みし人も與みし神も與みし佛も與みするなり、正義の存する所に天祐あり、光明あり、而して慈悲は汝の傍にあれり、これ界々互具の根據ある最上の神秘なり、豈唯平等理に固着して國家と國家との生存問題を忘れ去るの愚を學ぶべけんや。

借問す、

我れ日本の柱とならん、
我れ日本の眼目とならん、
我れ日本の大船とならん、

この偉大なる誓願は日本國中古今を通して抑も何人の肺腑より出でたるかを。

これは素より有名なる敎祖日蓮の三大誓願なることは何人も皆知る所なり、然れども余り有名なる爲めに其門下の輩は、耳に慣れ眼に慣れて輕々に看過し、他の片泛たるものを耳にし目にして新奇の議論を試み、却て吾本化の國家觀を破壞するに至れるものあるを見る、豈戒心せざる得けんや。

佛敎は世界何れに到るも不可なしと雖も、特に我國に於ては永く國母たるの歷史を有せり、特に吾本化日蓮門下の敎義は、偉大なる最上の神秘に坐して全然日本化し、日本魂と調和して純然たる國家主義を構成するに至れり、他は且く措き、日本の如き特種の歷史を有し、異彩を放てる國家に在りては、彼の頑癬なる國家

主義者の言に傾聽せず、又社會主義及び個人主義にも雷同せず、完全なる國家主義を研究し採用せざる得からず、日蓮の國家觀は完全なる國家觀なり、余はこの明確なる國家的宗教を撰擇し、國家思想の宣傳に供せんことを希ふものなり。(つゞく)

（次號の讓告）

五、統一的宗教を撰べ

三、本尊と信仰

一、宗教に於ける本尊の地位

二、宗教に於ける信仰の地位

三、現代に於ける相承論の價値

摩訶般涅槃管見（承前）

東金　森川薩山

大智の德王菩薩尚ほ疑念有り、「世尊よ世尊、煩惱を斷ずる者を涅槃を得と名く、若し未だ斷せざる者をば名づけて不得と爲す、是の義に依れば、涅槃の性は本無にして今有り、若し世間の法本無今有を無常と名づく、譬へば瓶等の本無くして今有り、已に有て還て無し故に無常と名づくるが如し、涅槃若し爾らば、何ぞ說て常樂我淨と言ん、世尊よ、凡そ莊嚴に因て成ることを得る者を悉く無常と名づく、涅槃若し爾らば是れ無常なるべし、世尊德王菩薩に告げ玉はく、涅槃の體は本無今有に非らず、若し涅槃の體の本無今有ならば、則ち無漏にあらず、常住の法は有佛無佛に性相常住なり、諸〻の衆生煩惱覆を以ての故に、涅槃を見ずして便ち謂て無と爲す、菩薩戒定慧を以て、其心を勤修して煩惱を斷じ已て便ち之を見ることを得、當に知るべし涅槃は是れ常住の法なり、本無今有にあらず、是の故に常となす、善男子、暗室の中の井に種々の七寶あり、人亦た有と知れども暗き故に見ず、有智の人善く方便を知て、大明燈を燃して持ち往て照了して悉く之を見ることを得、是の人此に於て終に水及び七寶本無今有なりとの念を生せざるが如し、涅槃も亦た爾なり、本自より之れあり今に適めたるに非ず、煩惱の暗の故に衆生見ず、大智の如來は善方便を以て智慧の燈を燃して、諸〻の菩薩をして涅槃の常樂我淨を見ることを得せしめ玉ふ、是の故に智者此の涅槃に於て說て本無今有なり

と言ふべからず、善男子、汝莊嚴に因るが故に涅槃を成ずることを得れば、無常なるべしと言ふは、是れ亦た然らず、何を以ての故に善男子、涅槃の體は、生に非ず、出に非ず、實に非ず、虛に非ず、作業生に非ず、是れ有漏有爲の法に非ず、見に非ず、聞に非ず、墮に非ず、別異の相に非ず、亦た同相に非ず、往に非ず、還に非ず、去來今に非ず、一に非ず、多に非ず、長に非ず、短に非ず、圓に非ず、方に非ず、有相に非ず、無相に非ず、冬に非ず、色に非ず、因に非ず、果に非ず、是の義を以ての故に涅槃は是れ常恒に變易せず、譬へば盲人日月を見ず、良醫之を療して便ち見ることを得、而も日月は是れ本無今有に非ず、涅槃も亦た復なり、

外道婆羅門議して曰く、瞿曇は狂か狂するか狂に異なるなし、世間の狂人は或は歌ひ或は舞ひ、或は哭し或は笑ひ、或は罵り或は讚む、怨親に於て分別なし、沙門瞿曇或は我れ淨飯家に生れたりと說き、或は生れずと言ひ、或は生れ已て七步を行くと說き、或は行かずと言ひ、幼少より世事を習學せりと說き、或は我れ一切智人なりと言ひ、或時は宮殿に處して娛樂を受け一子羅睺羅を擧げ、或時は厭惡し訶責し惡賤し、或時は悉ら苦行を修する六年と言ひ、或時は他の苦行を罵詈し、或は鬱頭藍阿羅邏等に從て未聞を稟受すと言ひ、或時は彼等知曉する所なしと言ひ、或時は菩提樹下にて眞正道を得たりと言ひ、或時は我れ樹に至らずと言ふ、或時は我身此れ涅槃なりと言ひ、或時は身滅する是れ涅槃なりと言ふ、狂なり狂なり沙門瞿曇、曾て諸行は無常なり苦空なり、無我なり不淨なりと說く、時に我等が弟子聞て恐怖戰慄し、其語を信受せざりき、今や瞿曇大衆の爲めに、常樂我淨の法有りと說く、我等が弟子是の語を聞き、我等を捨て瞿曇の語を受く、瞿曇は慈悲を修すと言ふ、是れ虛妄なり眞實に非ず、

若し慈悲有らば云何ぞ我等が弟子に其法を受けしめ、我等の利を奪ふや、慈悲は他の意に隨順する者なり、然るに瞿曇さるとなし、瞿曇は、貴族なりと言ふ、是亦た虚妄なし、何を以ての故に昔より以來た大師子王の小鼠を殘害するを見ず聞かず、若し瞿曇貴族ならば、如何ぞ今我等を惱亂するや、瞿曇は大勢力を具すと言ふ、是れ亦た虚妄なり、何を以ての故に昔より金翅鳥の鳥と共に諍ふを見聞せず、瞿曇は他心智を具せりと言ふ是れ亦た虚妄なり、何を以ての故に、若し此智を有せば、我等の心を知ららざるや、嗚呼世間は癡闇にして眼なく、福田非福田聖人非聖人を知らず、先舊智の婆羅門を棄捨して年少の瞿曇を供養するとよ、瞿曇沙門は大功德を具せりと言ふ、然るに生後七日にして母便ち命終す、福德と名づくべからざる乎、去れど其身に三十二相八十種好無量の神通を具足せり是れ福德の相なる乎、心に憍慢無くして機に依て聞訊し、言語柔輭にして放逸の行なし、斉志俱に盛にして心卒暴ならず、王國多財愛戀する所なく、日夜常に法を說く、

是れ或は功德聚なる乎、否な〳〵、我等曾て先舊の智人に聞く、百年を過ぎ世間に一の妖幻出ると有るべしと、嗚呼今の瞿曇は必ず是の妖幻ならん、去れど瞿曇沙門は受けたる性柔輭なり、苦行に堪へず外事に輭はず、技藝書籍論議を知らず、請ふ共に詳かに正法の要を辨せん、彼若し我等に勝たば我等當に給事すべし、我等若し彼に勝たば、彼れ我等に事ふべし、婆羅門は世尊の許に馳せたり、婆羅門は一見世尊の慈光に打たれたり、……世尊の慇懃なる口輪に、婆羅門の淨樂我常は破れたり、……彼等は言の如く世尊に給事しぬ、……彼等は踊躍歡喜しぬ、……彼等は摩訶般涅槃に住するを得たり

未來世に身を受る？受けざる？、過去世に本と身有りし？無き？、是の身なる者有る？無き？、我なる者有る？無き？、我有らば肉躰？精神？、我は一切に遍する？我は各別なる？、肉躰有つて精神ある？、精神有つて肉躰有る？、無常？常住？、微塵の集合？否？、煩惱此身を作る？、此身煩惱を作る？、神此身を作る

？否？、貴賤貧富等は自性？否？、父母此身を作る？否？、我は心に住する？、眼中に住する？、身中に徧する？、何處より來る？、去て何處へ至る？、誰か生る？、誰か死する？、我れ過去に於て男か女か果た畜生？、若し罪を爲せば未來に罪を得る？、若し善を爲せば其果は何？、是の如き疑見暗雲心を覆ひ、六種の心を生ず、曰く決定して我有る乎、曰く決定して我無き乎、曰く我我を見る乎、曰く我無我を見る乎、無我我を見る乎、曰く我作我受我知乎、吾人の肉躰を我と言はんとせば、此の肉躰は破すべし壞すべし、打つべし裂くべし、消滅し又た增長す、吾人の心を我と言はんとせば所謂る意馬心猿にして定住せず、緣に觸れ境に投し、千變萬化し、邪となり惡となり迷となり謬となる、然らば眼か、眼能く物を見るとすら眼見るに非ず、境あり光線あり意識あり初めて眼能く物を見る、眼決して獨立に見るに非ず、元來吾人の平凡なる眼耳鼻舌身意六根ありと雖も、色聲香味觸法の六境無くんば、一色一香一味なし、六根六境相對し相觸れ其處に六塵起る、然らば六塵は我か、否な六塵は念々に消滅し刻々に移變す、恰も熱鐵丸を水中に投せし一音響に異ならざるべし、然らば自在天神、我を作り我あるを知らしむる乎、若し神我を作りたりとせば我は能造所造なり從て無常なり、尙ほ我作我受にして、我の有る乎無き乎を疑はしむる惡戲は余りに罪深し、嗚呼吾人は廣大無邊の法界に六尺に足らざる一肉團を有し、蚊虻の如き小智を以て横目竪鼻、兩脚にて蠕動し、天地の靈と揚言するも、因緣の深理を解せず觀ず、身自ら十二因緣の瓶中に座し、左顧右眄如何に見るも瓶の中廓と我身のみなり何にとて大我を知るを得んや、彼の蠶を見よ、或は食し或は運動し或は靜止し、日夜に無明愛著の桑葉を食ひ、食し終て生と老と病と死の糸を已れ遲れじと繰出し自ら繭の中に過去現在未來を作る愚も亦た甚だし、然らば我は何か、吾人之を捕へて示めすを得ず、然り指示するを得ずと雖も而も實在なり恰も空氣の如し、空氣の者たる之を捕捉し此を指示するを得ずと雖も、常に吾人の身體を圍繞し、平凡の

吾人を牛活せしむ、我も亦た然り、吾人之を捕へ之を指示する得ずと雖も、無限の光明と無限の勇氣と無限の慈悲と無限の生命を吾人に與ふ、大我の慈光に觸接せざる者の日月は暗く風雨は寒く百花も飽ならず鳥聲も悲哀なり、朋友は怨敵なり親族故舊は慘刻なり生と老と病と死は常に彼等を壓迫すべし、若し大我に觸んが日月は清明にして風雨は時に適し、花笑ひ鳥歌ひ、世界は悉く彼等の親友同胞なり、彼等は時に或は病癒の裡に呻吟するも常に慰安の光明を得、時に貧窮災厄に遭遇するも其處に勇氣の活路を見出さん但に太陽と云はゞ直に是れ光と熱となり、是れエーテルの物體分子の振動にして、約八分二十秒時にして約三千七百萬里を距たる我地球に到達し、吾人の是を感ずるはエーテルの波動が吾人の網膜に達するとき、視神經を刺激するなりとの說明や良し、去れど物質の說明に單に汲々とし一切物質の說に甘んずる者は太陽の照を去り明を與へ萬物を生育せしむる無限の力を意認せずんば、遂に太陽の現を沒却するのみならず未だ科學の奥底に達せざる者なり、或時簫の名手あり彼れ一たび吹奏せば、天地を震撼し天女來りて舞ふの概ありき、愚人側に坐し、恍惚身を忘れ時に喜び時に哀しみ、其の妙音を尋求せんと決心せり、吹奏終りて竊かに簫の解剖を初め、一々竹管を研究し、數年を過ぐ去れど管中何等の聲なし、唯だ空洞なりき、吾人若し此の愚人たらんか、邪推、不平、猜疑、暗黑、罪惡、疾病、杞憂、陰鬱、厭世、病的無氣力に一生を畢り、到底人生の趣味を解するを得ざるべし、此の如き人は、既に枯死す、是れ沈香も焚かず屁もひらぬ鈍漢にして、空々寂々一生を迷海に漂泊せんのみ、醒よ、起よ、其處に佛陀の御聲あり、「大我とは如來なり、如來は慈なり、慈は大乘なり大乘は即慈なり慈は即如來なり、慈は即菩提道なり菩提道は即如來なり如來は即慈なり、慈は能く一切衆生の爲めに父母となる父母は即慈なり慈は即如來なり、慈は乃ち不可思議なり、諸佛の境界の不可思議なり、諸佛の境界は即是れ慈なり慈は即是れ衆生の佛性なり、是の如き佛性は久しく煩

惱の爲めに覆蔽せられたり、慈は即是れ常なり、常は即是れ法なり、法は即是れ僧なり、僧は即是れ慈なり慈は即如來なり、慈は即樂なり、樂は即是れ法なり、法は即是れ僧なり、僧は即是れ慈なり慈は即如來なり慈は即淨なり、淨は即是れ法なり、法は即是れ僧なり僧は即是れ慈なり慈は即如來なり、善男子慈若し無常なり、無常即慈ならば當に知るべし、是の慈は是れ聲聞の慈なり、慈若し是れ苦なり、苦若し是れ慈ならば當に知るべし、是の慈は是れ聲聞の慈なり、慈若し不淨なり、不淨即慈ならば當に知るべし慈は是れ聲聞の慈なり、慈若し無我なり、無我即慈ならば當に知るべし、是の慈は是れ聲聞の慈なり、」吾人は今や聲聞の慈に住せず、佛陀無緣の大慈海中に一身を見出し、大我に觸接せよ、佛陀は失望したる者の光明なり、佛陀は悲哀に沈める者の慰藉者なり、佛陀は壓せらるゝ者の救濟者なり、佛陀は無一物者の寶藏なり、斯く眞誠なる信仰を得よ、彼等は眞に幸福なり、不老不死なり、彼等は摩訶般涅槃に住するを得べし、

或人曰く凡を實在の意識は經驗を基とす、涅槃は不可見なり、未經驗の境なり、然れば空なり、非有なり、非實なり、何ぞ涅槃海に常樂我淨あらん、從て空の涅槃海の佛陀、如何に常住にして人類の苦悶を根本的に救濟するを得んや、若し是れありとせば迷信なりと、然り涅槃を空とし無とせば佛陀の渴仰は實に愚の骨頂なり、迷信なり、去れ必此の如き言は何れより來るか、他なし憍慢の我見より來る、彼等は自己既得の經驗と智識を以て無上の者とし、己れの經驗外の者は直に取て誤謬とす、去れど思惟せよ、人類の經驗は左程貴き乎、人類の經驗智識は月に年に轉變せざるか、吾人幼少の時日は東より出て西に沒し、日に日に太陽は新なる者と思ひたるともありき、父母其の誤謬にして太陽は何時も同じき者なりとの談と經驗によりて、太陽は一なりと知りき、去れど太陽は回轉し地は平面なりと思ひたり、吾人小中學等に入りし時懇切なる敎師は曰く、大小無數の恒星も其一なる太陽も、常に轉動せず反て吾等が棲む地球は其姉妹なる諸遊星と獨樂の樣に

廻りながら、太陽の周圍を不斷遇遊し、以て春夏秋冬晝夜の別を生ずとの事なりき、吾人は先生の言を疑はじ、第二の智識を得たり、太陽は不動なり地球は廻轉す、從て吾人四五才の時の見解は破れたり、然るに今や定說と信ぜし不動の太陽又た運き初めたり、其運動は砲丸の速度も管ならず、太陽は天の一方りイラ星座に向かつて地球其他の遊星を率ひて突進し、太陽は半時間に一萬哩以上の速度にて飛び、一日には四十八萬哩以上目的地に接近せりと云ふ、第二の智識は破れたり、不動の太陽又た飛びつゝあるとは、是れ單に一例に過ぎず、是の如く定說として信ぜられし理論の如何に變動せしかを思へ、今日の定說は明日の定說に非らず、明日の斷案は明後日の疑問なり、斯く不確實なる理論を墨守し既得の智識經驗を規矩とし標準とし、其の範圍に入らざる者は悉く空なり非實なりとして拒絕するは、一見學者の如しと雖も、實は余りに小見なり、余りに偏見なり、余りに迂愚なり、吾人斯く言へばとて科學的推理研究を無用なりと云ふに非らず、社會の物質的進步は科學推理の賜に外ならず、故に科學推理は大に歡迎し大に奬勵する處なりと雖も、單に科學的智識のみにして萬事萬物を律せんとする者には注意せざるを得ず、

一寒村に餅を商ふ老婆あり、農家休日の日老若男女此店に入り餅を食ひ、其の美味を賞し喜嬉歡笑鄕を壓す、鄕人、帝都に一知己あり、自鄕の餅を傲らんと欲し帝都に至り、其餅を知人に贈る、知人一見大笑して曰く、君の好意は感謝す、去れど是の如き餅は帝都の大道にもなし、我家の下僕と雖も食はざるべしと、鄕人大に怒り、都人士は餅の美味を知らず、相共に談るに足らずと歸りたりと云ふ、(列子に此れに類する例あり面白し)此れ何を意味する乎、眼を開きて物あり、眼を閉ぢて物なき吾れのみに執着せず、一度び無限の神秘と語り、一大眞靈に觸接し、吾人の如何に小にして彼の如何に大なるを知れ、彼れは時間を絕し空間を絕し、現在にして而も三世に通じ、常恒不變不生不滅の涅槃海を觀よ、吾人の經驗以外更に大なる者有るを觀ん、人若し此の涅槃海に遊び佛陀の慈光に浴せんか、初めて經に所謂る、渴乏者の清涼の水を得たる如く、寒き者の火を得たる如く、子の母を得たる如く、渡りに船を得たる如く、病に醫を得たる如く、暗に燈を得たる如く、貧きに寶を得たる如く、民の王を得たる如き、無限の滿足と無限の慰安と、無限の幸福と、無限の勇氣と、無限の生命と無限の勢力を得て、一切の生、一切の老、一切の病、一切の死の縛を解くべし、

先尼言く、世尊よ、惟願くは大慈我が爲めに宣說し玉へ、我れ當に云何してか是の如き常樂我淨を獲得すべきや、佛言く善男子、一切世間は本より已來た大慢を具足す、能く慢を增長して亦た復、慢の因慢の業を造作す、此の故に今者慢の果報を受て一切の煩惱を遠離し常樂我淨を得ると能はず、若し諸の衆生一切の煩惱を遠離するとを得んと欲せば、先づ當に慢を離るべし、

(完)

予が信仰の回顧を述べて未信の友の返翰に代ゆ

北米　南　山　子

予は幼少の時より人並以上に、最も疑惑の妄念が强盛てあつた、友人は子供心に親の命令は一も二もなく服從してをつたが、予は如何に親の言ひ付けても、自分の腦裡に成る程と合點せねば、快よくその仕事も手傳はぬと云ふ風な、頗るつきの意地わるであつた、からして成長するに隨つて屁理屈坊となつたのである、友人はれ母樣やお父樣に連れられて、さも嬉しそうにお寺詣りをしておるのを見るにつけ、予はその何の故に寺に詣るのである？と云ふ事が知れぬので、その友人なぞに遇ふ度び毎に大にその行動を嘲笑して、自分は君士然たる樣に眞面目で濟してをつた、所で不圖した母から予は今日の如く信仰の人間と生れ變りて、御佛のあたゝかさ大悲の懷に安らけく眠ることが出來る是眞佛子の一人に數へらるゝに至つたのである。

その動機は、忘れもしない、予が尋常小學校に上つた

文政年、即ち九歳の折、時も淋しき秋の暮れ、萬目皆な悲哀を含むりの頃の末つ方、予が無二の友は不時の病に冒されて、遂に他界の人と化したのである、その友が病の床に呻吟してをる時、予は母よりの命令を受けて、見舞物を折り〳〵持つて行ては、友の枕邊に寄り添ふて、いろ〳〵な世間話をしては友の病苦をなぐさめてをつた、りの時友は予に向ふて言ふに、「若し今僕が死んだならどうするのであらう、もうお前等と一所に竹馬に乘つたり、學校に行たり、凧を揚げたりすることは出來ないであらうか、もしさうならば僕はどんな苦がいお藥でも飲んでも一日も早く病氣をなほしてお前等と一所に遊びたい」と、かう予に言つた、其時予は子供心に何となく淋しみを感じた、予答ふらく「そんな事があるものか、お前は死にはしない、若し死んだら僕も一所に行てお前と遊ぶよ」と云つた時に、傍らに看護しておられた友の母上は、袖を濡らして面をそむけて泣いてをられたが、日ならずして遂に友は僕をこの娑婆に置いて旅立つた、その時はじめて「死」と云ふことが腦裡に泌み込んだので、それからと云ふものは何となく佛樣や神樣が戀しくなつて來た、友がお寺詣りをしてをるのを見ると、羨しくなつて來た、茲に予の心機は一轉したのである。

予の父は最も信心深き人であるが、折り〳〵お酒の相手に、僕と弟とを膝下に呼び寄せて、いろ〳〵宗教の話をして聞かされた、日蓮上人の誹口法難や、佐渡の島流しの話などは、大に趣味を得て、嬉しげに一生懸命に聞いたから、十中の七八　それを覺へて、それをば今度は友人に聞かしては喜ぶやうになつた、或る日父は二人に向て曰はるゝには、「父がこれから演說を敎へてやるから一つやつて見よ、もし上手にやれたら何でも買つてやる」と、自由大懸賞の演說會とも云ふべきものが催された、その文句は、『諸君よ……、吾輩の精神は淸らかなものでありまする、如何んとなれば顯本法華宗の宗義を持つものでありますから』の數語て、聞き終るや、二人は之れを暗誦し、早速大和コタツを足臺として、節も可笑しく大聲に、「諸君よ、吾輩の精神は……。」と云ふ風に兄弟變る〳〵初めると、近所の子供連れは何か面白い事でもあるかと澤山やつて來る、そーなると二人は友人を聽衆として、堂々右の文句を並べてをつた滑稽時代もありましたが、漸く年長ずるに連れて、父母に從ひお寺にて說敎を聞くを無上の樂しみとする內、少しく宗敎の信仰に趣味を感じてまいりました。

斯く信念が發動し初めてからと云ふものは、お寺の坊さんを見ると自然襟を正ふして、尊敬を拂はずには居られない樣になり、本宗の僧侶の人に會する際は、一種云ふ可からざる尊敬の情と愛慕の念を懷くこととなりました、それにつけて思ひ出すのは、今より十年の昔、彼の四大格言問題當時、宗門の東鄕大將即ち今の本多管長が、岡山の眞言宗中學林に、上品某の敎陣を破り、宗風堂々と法旗を中國の天に輝かされてゐつた時、當時內山下の弘通所に居られた本多上人が、本宗篤信家高木三次郎氏の宅で、御敎が開かるゝ事を聞いた、高木氏の宅は予の家より二町計り南にある、上人の一行は必ず予の宅の前を通行して同家へ行かるるのである、最初は午後二時に御光來と聞いたから、學校から歸るや否やカバンをしまつて、門前に立つて上人の一行を歡迎すべき意氣込み、處が三時が來ても四時が來ても一行の姿が見へない、時に母上の來りて「お前は學校から歸つてまだ御飯も濟さず、そして門口に立つて一体何をしておるのか」と問はれた、予は得々然として、「本日本多上人が高木へ行かれるので、此前を通行されるから待つて居つて上人にれジギをするのである」と答へた、そして夕飯も忘れて待つて居たら、日暮れ時に上人の一行は車を驅せて來られた、そこて予がおジギ信心のそれも遺憾なく成効した奇しき話もある。

夫れからも一つはそれまり、數年後の事、本行寺の能仁上人が或日、岡南の或る倶樂部に演說會を開かれ、その閉會したのが午後十二時に亟々たる大寒肌を裂く冬ざれ時、道行く人も絕へてなき岡南の片田舍、ましてや夜半の事、誰れかあつて散步の粹を試むるものが

ない、その倶樂部から本行寺へは殆んど一里、例の意氣天を衝く上人は單身獨行何の臆する色もなく、インバネスを裝はふて歸へられる、時に予謂へらく、この眞夜半に人なきを倖ひとして萬一上人に危害を加へんとする悪漢出て來らんとも期し難し、わが身は輕く上人は重し、若かず身を以て上人を護らんと、即ち予は上人に隨行して人通りも多き、岡山一等の街道まで見送つた事があつた、時に上人の曰く、「君は今頃何の用事ありてか何處に赴くや」と、予は謂へらく、予もし實を語らば隨行を斷はられるに相違ないと考へ、「實は都合上橋本町の支店へ行くのである」と、虚言を吐き暗に信仰の寸心、外護の一分を盡した事があつた、こんな事なら馬鹿げた話ではあるが筆の順序として記すこととした。

以上の三つのお可笑な話が、予が信仰の回顧中の三義とも名くべきものである。

予は斯くする内、本化の聖敎を奉ずる信者となり、何となく常に心の中に嬉しさを感ずることなつたこれは獨り予のみではあるまい、一般の信者が日夜に經驗して居らるゝ事だと思ふ、その何の故なるかは到底說明することは出來ないが、この一事だにもみ佛の大悲は忘れ難い、前にも言つた通り、未信時代の予は死を知らず、死を知るや死を懼れて居た、人生の不如意を考へては愚痴をこぼした者であつた、けれども一度御佛の救ひを認める樣になてからの予は、佛の示し給ふ死即ち輝ける寂光の寶土に召さるゝこと、無上の光榮として喜び感謝するに至つた、これ即ち安心立命を得たのではあるまい乎、この感謝と喜び、報恩謝德の念胸に溢れ、玆に初めて傳道と云ふことが起る、如何にもしてこの喜ばしさ樂しさを、人に傳へたいとの熱心より、予は一般の人々に顯本の信者になる樣にと、常に手紙や對話などに於ても說き勸めておるが、不思議なる哉み佛の惠光は誠に照すこと無量である、是れ迄宗敎なぜには頓とお搦ひなしの先生、熱心なる信者を見ては、迷信である妄信である等と嘲笑して居た人達が次第に佛の大恩を悟り、佛の大法を研究する樣になり

つゝあるは、實に驚く可き佛の力と云はなければならぬ、宗祖の御書を拜するに曰く、『顯くば現世安穩後生善處の妙法を持つのみこそ、只今生の名聞後生の弄引なるべけれ、須らく心を一にして南無妙法蓮華經と我も唱へ他をも勸めんのみこそ、今生人界の思出なるべき、南無妙法蓮華經』と、予はこの文を拜するにつけても、益々感憤激勵せざるを得ないのである。

予の愛する親しき友あり、頃日一書を寄せて曰く、『予兄と文通の往復は何時も靈的問題なり、君は確乎一定の主義を抱ける、佛敎徒、殊に日本が生める古今の大産物、聖日蓮の宗義に精達せるの人、予は基督信者の家に生れし者、又聊かその敎理をも知らざるに非ず、然るを今故國を離れこの米大陸に渡りて、計らず予を迷ひの道より救ひしは、兄が所信の日蓮主義、常に惠送に預る「統一」誌は現今の予の救世主なり、さるを兄よ、予の胸底も想察する所あれ、予にして今佛敎信徒たらんか、基督敎のれ固りなる父上母上に對して、予は忽ち衝突し、一家の平和はこれが爲めに破れん、云々』と列り、一家の平和はそれが爲めに破らるゝならんさりながら凡そ人間が事をなすに當りては、小をすてゝ大を取らなければならん、目前の小利に汲々として永遠の大計を忘れてはならぬ、我大日本帝國はなぜ露國と戰爭をしたか、決して好んで如斯多くの生命と財產を犧牲として戰つたのではない、要するに正義の爲め、人道の爲めに、永遠の平和を望んだ結果に外ならぬのである、されば吾等は宇宙の大眞理、即ち佛の聖旨を奉戴する時に、邪悪なる此俗界にて、悲しびべき幾多の出來事は、必ず吾人の目前に横はり來る、蓋し之れ當然の事である、宗祖は『惡魔競はずんば正法と知るべからず』と說かれて居る、これを恐れては佛陀の大慈大悲の光明に浴することは不可能である、人間霜露の命をもつて、一時間さきにはこの地上を取拂はるるやら知ぬ果敢なきものであれば、今と云ふ今、福音の大悲に接して、人生の慰安を求めねばならぬ、日蓮上人は、『父母の頸を到ねん、念佛申さずんば、なんどの種々の大難出來すとも、智者に我義破られずんば

用ひじ』とこの確信こそ、うべ男子の取るべき本領ではないか、願くば一家の家長たるべき人々は、殊更に此點に注意し、一家を擧りて御佛の救ひに浴せしめ、平安と愛に充ちたる、佛教的團欒の家庭を經營して貰ひたい、予はこの稿を草して友の返翰に代ゆることゝする、

仰き願くば大慈大悲の釋迦牟尼佛、世の迷ひの人をして速に御佛が聖教の圍に導かせ玉へ、南無妙法蓮華經

稟告

本號には、坂本老師の當麻義抄講義を掲載すべき筈の處、誌面の都合に依り次號に讓り申候、又中村日錦師の寄稿も次號に讓り申候　御斷旁此段稟告候也

（編輯部）

金澤教界革新の曙光

樂本一子

往昔百萬石の大守として北陸の雄鎮たりし前田家の居城加賀國金澤は、今も尙ほ加能越三州の行政府として石川縣廳あり、陸軍團隊の配備には師團あり旅團あり聯隊あり、教育機關には高等學校あり、其他商工庶般の事業備はり、人口百萬、北陸第一の都會なり、而かも全地に於ける宗教界の狀態、就中我が日蓮門下の現狀を見るに、頗る悲むべきものあり、抑も曾て幕末の頃、全地立像寺に優陀那日輝あり、現日蓮宗最近の碩學として當時最も盛名ありさ、されど彼れが優陀那流の異說迷論は全く聖祖の主義に悖りたりしかば、全地本宗本長寺の當主先師永昌日鑑は、如何で彼れを默過すべき、師は先きに能州に在つては示正篇を著はして權徒靈城の邪迷を折破し、此の時輙ち心遂醒悟論を著はして優陀那の本迹歸宗論の迷謬を論さる、爾來星霜を經ること玆に四五旬、本迹の論爭は已に死し去て今や現に彼の徒は淫祠迷信に耽りつゝあるを見るに到れり、豈に慨嘆の至ならずや、玆に於て乎全地本宗本行寺住職紀野俊耀師は、本年一月廿九日より二月二日に亘り全地の北陸新聞に投書して、これが革新を叫ぶに至れり、前號本誌上に掲載せる「革新すべき現代の日蓮宗」と題する論文即ち之れなり、而かも全地日宗の眞俗は毫も反省せざるのみならず、斯の忠言に耳を覆

ひ口を緘み知らざる爲ねして依然その蠱的行爲を勵行しつゝありと聞く、由來日宗眞俗が迷信の淵に沒在せること年久しく惡業の因緣容易に消滅せざるべきも、上に慈愍深き本佛ましまして毎自の念願止む時なければ、早晩覺醒の期あるべきを慮ひ、紀野師は即ち二月十四日一書を裁して、これを全地日蓮宗錄司を始め、本妙法華、本門法華及び法華の三宗各管事に送くれりその文次の如し

謹上　頃日春氣色增し候處、御盛榮至欣至賀此事に御座候

偖て聖祖門下九教團の多きを數へ候は、一見盛大なるが如しと雖も、仔細に之を想へば、同じ聖祖の法流を汲みつゝ各各に門戸を構へ隙壁を築き分裂亦分裂、異体同心の聖訓に背き候事、實に佛祖に對し奉りこよなき罪惡と存候、由來教團の分派今日の如きに至れるもの、始め一致勝劣の論爭より事起り、滔々として數百年間の大諍論たりしもの、今や門下の何れに一致對勝劣の論議ある事なく、各派一同に本門壽量の妙法を信念しつゝあるは、各派の宗制に照らして明瞭に候

されば已に分派の根本問題に於て事實上解決せられたる今日は、當然各派統一の機運に向へるものに候はずや

然るに最初分派の當時に於ては、殆ど論題とならざりし別勸請、雜亂勸請の如きもの、中古宗風の墮落と共に蔓延し、今や其弊害は、實に彼の本迹一致の台教的妄見の比にあらず候

今日　聖祖門下の多くは、多神散漫の對境を許して本化統一の信念を濁亂せしめ、卑賤なる利益主義のみを皷吹して、對絕兩善の妙旨を忘失せしめ、深きを捨てゝ淺きに就かしめ、實教の文を得て權教の義を解せしむる、退大取小の罪、實に輕からずと存候

依て憂宗の徵志止み難く、去月廿九日より本月二日に至る北陸新聞に所見を公にして、宗風の革新、本尊の統一を叫ぶの已むを得ざるに至りし次第に御坐候（乞往見）

されば此際散漫無義の勸請物を徹退し、三秘統一の宗是に從ひ、熱烈清新の信念を皷吹するは、我等門下たるものゝ天職に候はずや

若し派別の妄情脫し難く、雜亂勸請の惡習を墨守せられなば、宗風倍々銷沈し、遂には彼の華嚴、法相の如く、名あつて實なきの悲境に陷るか、或は又一

種の淫祠妖教として社會を賊するに至るは、今日を以て推論するに難からず候

實に派別の妄執、無意義の勸請は、内、佛教統一の活動を阻害し、外、權門邪教の悔どりを受くる事、偏に門下僧衆の罪に御坐候はずや

顧くば賢明なる貴宗御僧侶に於ては、本經及び聖祖立宗の統一的なるに鑑み、此際斷然本尊巳外の勸請物を停止し、協力一致、三秘統一の聖旨を奉じて、布教傳道の實を擧ぐるに御努力被下度候

若し復今日の別勸請等は、經判に背かず、宗是に悖らざる正義なりとの御意見ならば、責任ある對決、若しくは文筆に依て、理非を究明し正邪を論決して僧俗の迷雲を拂ひ度切望する所に御坐候

巳上申述候如く、本尊巳外の勸請物許否に就き、貴宗内御一統御協議の上、貴氏等が熱烈なる道念に訴へ、旗色鮮明の態度を以て責任ある御回答奉待候也

敬具

明治四十一年二月十四日

顯本法華宗　本行寺住職　紀野俊耀

石川縣日蓮宗錄司　鋤田孝山嚴

同本妙法華宗管事　貫名志堅殿

同本門法華宗管事　高村日祥殿

同法華宗管事　榎本靜延殿

（各通）

かく金澤四十余ヶ寺の代表者に宛て挑戰的書簡を發して、翹首その回答を待ちつゝありしも、何等の反響だもなければ、紀野師は仝月二十二日復び督促の書簡を送りぬ、その文に曰く

本月十四日附を以て本化門下革新の先決問題として別勸請廢止の件に付貴宗、及本妙法華宗、法華宗、本門法華宗へ御意見伺上候處、爾後今日に至るも何等の御沙汰無之、爲法遺憾に存候、一日も早く正邪を決斷して門下迷牛の僧俗の爲めに「以冷水灑面令得醒悟」せしめられ度候

事を曖昧模糊の間に處するは、世俗尚恥づる處に候況や佛子に於ておや、況や本化門下最大重要の本尊問題に於ておや

由來信仰上の問題は、勝敗、老弱、大小等の私情を以て躊躇すべきものに候はず、宜敷經判の指針に隨從して進退取捨する、之れ眞佛子の本領と存候

依て急々是非の御回答有之度庶幾する所に候、若し御回答もなく、御回答の時日も御指定なき時は、貴

同本門法華宗管事　高村日祥殿

同法華宗管事　榎本靜延殿

宗獨立の資格にも關する事に候へば、至急御尊答奉待候、不具

二月廿二日

顯本法華宗　本行寺　紀野俊耀

石川縣日蓮宗錄司　鋤田孝山殿

同本妙法華宗管事　貫名志堅殿

同法華宗管事　榎本靜延殿

同本門法華宗管事　高村日祥殿

以上の交渉に對し四宗四十餘名の僧衆は、如何に處理せしか、未だ何等の消息に接せずと雖も、思ふに右の折衝を動機として花々敷論戰を交ゆるか、正義に伏して迷信狀態を改むるか、將た有耶無耶の内に七十五日の空過を待たんとするか、要するに就にしても彼等僧衆に對し順逆二緣を結べることは、最も悅ぶべき現象にして、向後仝地教界刷新の活劇は、實に今日の斯擧を以てその開幕の第一齣と見做すべし、寄語す、四宗四十餘の僧衆よ、庶幾は奮勵一番刮目して時代の宗教家たる本分を盡されよ、今や太陽は巳に出でゝ三竿の高きに上ぼれり、焉ぞ諸子の隋眠を宥さんや、起きよ起け、以て卿等の所生を辱かしむる勿れ、城者破城の垂訓は懸りて卿等の頭上に在り、豈に猛省せざるべけんや、

天眞獨朗

篁堂

○人格を完全にし、理想を高潔にし、人生の幸福を增進せしめ、人類の本領を光顯せしむるは、宗教の職掌である

○人生には、善惡の表象がある、惡を驅除して、善を增進するは、人類の責任である、黑死病虎拉刺等の惡疫を、撲滅するは、人類の力であると同じく、行爲に顯はるゝ姦淫盜賊等の害毒も、人類の力によりて滅除せざるべからず

○現代思想界の趨向は奈何、所謂根なし草の波の上に浮べるが如く、昨日はニウチエーを鼓吹するかと思へば、今日はトルストイを崇拜し、今また自然主義の流行を見る、畢竟するに國民の思想が、しかく豹變するは、宗教感化の冷却せるに依る、

○本然必然を認めずして自然を描き自然を想ふ者は、

いまだ自然の清韻を發揮することが出來ない、姦淫盜賊墮落虛榮等の惡現象は人生のガスである、塵芥である、害毒である、これを材料として、小說をものする人は、人生醇化の意義を悟る能はざるの致す所である、

○現實主義は、現金主義である、現金主義とは謂ふまでもなく利己主義にして、目前の利にはしり、自行化他の道念なきものである、現代思想の功利なるは精神教養のためのバチルスである

○人格の崇嚴を保の要素は信念である、信念の力は善事に進み、すべての害惡を滅却せしむるなり、人類の力とは信念である、惡と知り害と見て、これを改むる能はざれば、この人は未だ信念を有せざるなり宗教家の着眼すべき點は、實に此にある、教義信條に隨順すべく、しかもその教誡に反馳する行爲の者甚だ多きは何ぞや、

○名論卓說を叶き、衆をして頭を傾けて歡喜せしむる人も、その行爲に間然する所あれば、この人は聖祖の彈呵せられたる魔道の眷屬である、

○家庭は清淡ならざるべからず、圓滿ならざるべからず、莊嚴ならざるべからず、清淡にして、圓滿にして、初めて家庭の快樂を味はひ、莊嚴にして萬事行屆きたる家庭を作ることを得べし、宗教家は模範家庭を人に示すべし、而して不言の感化は、この中にあると思ふ、

○雜亂勸請は、教法の生命を短縮するものである、人を愚にするものである、その害を識れば、何ぞ早くこれを改めざる、在俗の迷妄に遠慮し、自己が收入の減少するを憂ひて、これを改むる能はざるのである、聖祖が極樂寺建長寺等の堂塔を燒き拂ひ良觀道隆等を法に處すべきを痛論せられたるは、民の誅求に苦しむを顧みず、私福を恣にして、毫も宗教家の道念なきを憐み給へるがためである、道ならぬことを行ふて不義の榮華に誇らんよりは、我は弊れたる衣を着て、教法の尊重すべき心掛を持續せむ、

○日本國民は、多くの資金を僧侶に吸收せられた、歐

洲に於てもまた然かり、その革命は、彼の僧侶が特權の下に不義の富貴に淫するを打破するためであり而かも僧侶は尙ほ政府保護の恩惠に浴して居る、之に慊きたらずして不正手段に訴へて金儲けを圖るは怨すべからざることである、雜亂勸請は、則ち不正手段の道具である、日蓮聖人が主張せられたる、卓見と、公明の意見に我は服從するなり、日蓮聖人の主張は、今日をして鎌倉時代のパノラマを想見せしむ、

○顯本法華宗は、雜亂勸請を嚴禁する主義である、否な、日蓮聖人の主義を嚴格に實行するのである、中古宗紀の弛廢たるによりて別勸請の弊害もありしが、現今に至りては、この害を匡正せられたるは悅ぶべきことである、他日佛教衰頽の時機に際し、光明を發現するは、顯本法華宗ならむ、

○國民が宗教意識の幼稚なるを利用し、ヤレ池上の長榮、ヤレ堀の内の祖師、ヤレ川崎の大師、ヤレ成田の不動などと、繁昌を自慢し、顯本法華宗は慾を知らない偏屈であると嘲笑する人があるが、我はこの嘲笑に對して滿腔の誠意を以て感謝す、何となればこれによりて我等教徒が、教法尊重の至誠を天下に告白せらるゝを喜ぶが故である

○宗教意識の幼稚なることに就て、面白い談を耳にした文學博士某氏が、角帽の學生を伴ふて、郊外散策に出掛られ、妙國寺に到る、門前仁王の傍に榜示あり、仁王を信仰の對象とすべからずと、あるを見て呵々大笑して曰く、本堂の木像と仁王と、何ぞ簡ぶ所あるべきと、令名ある某氏にして尙此の如し、教法の價値を知らざるは、洵に嘆かはしきことである

○學者の態度に就て、今昔の感慨を述べんに、昔は伊藤仁齋寺門を過ぎて叩頭す、門人怪みて、その所以を問ふ、仁齋答て曰く、主人に敬禮すと、今の學者は、侮慢の言語を弄して悅ぶ、思想の相異なる斯の如し、

○伯夷の風を聞く者は、頑夫も廉に、懦夫も志を立つと、伯夷は、清廉の士である、而してこの印象あ

り、日蓮聖人の門下にある者の、聖人の風を聞て、興奮するの勇氣あるか疑はし、若しありとせば、速に聖人の教誡に從ひ、健闘弘法の實を擧げよ、

○これを試みるの方法は、先づ、四箇の格言を主張すべし、これ聖人が、法命久住の爲めの宣言である、この宣言の、激烈なるに驚いて逡巡するは、日宗中古の歴史にあらずや、歴史は繰返へすものなり、今も尙然り、我等教徒の有する立宗已來一貫せる折伏主義の歴史に對し、何んと抗辯するも、事實を隱蔽する能はず、四箇の格言を理解し服膺するの運に向ひなば、弊害も廓清せらるゝてあらう

○佛は法を國王大臣に附すと、これ宗教は、國家によりて成立するものにあらずして、國家は宗教によりて成立する事を示したるものである、世の宗教家は、この宗教の偉大なる勢力を無視して、國家の權威に宗教の榮光を沒却するは、これ法命久住の意義を認識せざるのいたす所ならん、法命久住なるが故に、國家の興隆と國民の安樂を、實現することが出來る教法の生命をして減損せしめんか、國家は禍根相繼ぎ、滅亡の時機を早めん、

○各宗教家は、宜しく自宗の教義信條を勵行すべし、これが爲に排他の思想を誘起するに至らんも、これは寧ろ悅ぶべき現象である、教義の是非を諍ふは、その爭や君子なり、宗教家が、この思想を現實する時は、即ち教義發展の時である、宗教勃興の機運である、これに依て人生問題は、遺憾なく決定せらるべし、

顯本法華宗 宗務廳錄事

告知

第六教區　千葉縣山武郡增穗村東福寺ヲ仝縣仝郡大網町長福寺ニ合併シタリ

右明治四十年十二月四日附ヲ以テ合寺ノ認許ヲ得タリ

明治四十一年二月　顯本法華宗宗務廳

異動報告

死亡(一、四)　大學統　高石快成

轉任二區奉行寺住　九區最成寺住　梅澤天純

允許本宗僧員(以上二、一六)本多日生徒弟國友文次郎

命第三教區管事　大學統　井上日冲

滿期解第三教區管事(以上二、一五)仝　石橋鐵嚴

敎權僧都(以下二件二、二三)　仝　高橋遵碩

轉任十二區玄妙寺住　十九區本長寺住　三田村義俊

仝　八區本因寺住　七區法華寺住　堀江誠一

仝　七區法華寺住　八區本因寺住　三上義徹

仝　十四區了圓寺住　一區眞了院住　久我默宗

兼任八區立藏坊住　八區　金坂乾受

願免右立藏坊兼任　七區　長勇學

二等功勞章授與　廣島縣運華寺住　學士　安田台城

功勞ニ依リ僧階三級陞進中學統二等功勞　原田容廣

仝　權中學統　仝　古谷養眞

仝　仝　木村日順

仝　仝　轡勵光

仝　學士　吉田義掌

仝　仝　安田台城

仝　僧階二級陞進　中學統三等功勞　葦名玄饒

仝　權中學統　仝　高田日暢

叙權僧都　中學統　二等功勞　原田容廣

補大學統　仝　三等功勞　葦名玄饒

仝　權中學統二等功勞　古谷養眞

仝　仝　木村日順

仝　仝　轡勵光

補權大學統　仝　三等功勞　高田日暢

補權中學統　學士　二等功勞　吉田義掌

仝　仝　安田台城

特許緋金紋袈裟着用　權大學統　上田智量

賞狀下附　神戸布教所信徒總代　重松玉次

仝　仝　牧安次郎外六名

轉任一區本興寺住(以上二、二七)三區來光寺住萩原啓門

改名　義慣(二、二八許可)　學士補　片岡乙吉

轉任二區圓能寺住　四區圓成寺住　寺田泰正

兼任右圓成寺住　一區　川崎泰秀

轉任十七區長久寺住　五區法行寺住　中村明法

願免右長久寺兼住　十六區　大橋日襲

任第十四教區布教師補助(以上三、一)　學士　鈴木孝碩

死亡(二、四)　權僧都　三等功勞　能仁諦明

任七區本光寺住　學士補　片岡義慣

野口義禪　田上寬靜　坪永日監　銀井乾升

鈴木孝碩　三好信道　川崎英照　森義觀

第二回西部講習會準備委員ヲ命ズ(二、九各通)

雜報

●本宗管長の改選　現管長本多日生師は、來る五月十七日を以て任期滿了に付、本月二十六日宗務廳に於て管長選擧名簿を作成し、四月早々改選を發表せらるべく、その改選期日は四月十六日なりと聞く

●總本山に於ける諸種の會合　既報の如く來る四月

四日より十日まで一週間、總本山妙滿寺に於て西部第二回講習會を開催せらるゝに付ては、別項記載の如く野口本山部長以下その準備委員を命せられ、又同月十一日より十三日まで三日間例年の通り大法會と併せて日泰上人四百遠諱を執行せらるべく、次て十四日には全山內教學財團事務所に於て第二回評議員會通常會を開かるゝに付、理事長市橋民より評議員へ夫々召集狀を發せられたる筈なり

●寂光寺山日淵上人の御遠諱　安土問答に出席せられたる久遠院淵師の第三百五十遠諱を來る四月十五日頃本山寂光寺に於て執行せらるゝ豫定にて、總本山大法會登山僧の列席を請ひ嚴肅なる大法會を修せらるべく、その際野口僧正の編述に係る日淵上人傳を一般に施本せらるといふ、因に總本山に於ける日泰上人四百遠諱の紀念施本日泰上人傳と右の日淵上人傳は、共に信徒の讀ものとして編述せられたるものにて一部郵券二錢を送れば何人にても頒與せらるる筈なれば、志望者は京都二條寺町妙滿寺宛申込まるべし

●早稻田研究會と茗谷學園　早稻田日蓮主義研究會は二月二十九日午後一時より仝大學講堂に於て開會當日は講師本多日生師の「佛陀觀に就て」約二時間講演ありき（本誌に掲載す）仝會は來る四月二十五日頃には春季大會を開催すといふ、又小石川署谷學園の宗義研究會は本月一日その第十回を開き、當日本多講師の本尊略辯に對する講評終りを告げ、來る四月二十六日の第十一回よりは行法篇の講演に入る豫定なり

●越後高田通信　誌友越後高田中學教授文學士德谷豐之助君より主筆の許へ送られたる通信中の一部を左に掲ぐ

當地は寺院の多き事殆ど全國に類例無之との事に候へども、名僧智識は一人も無之、教界不振實になさけなき有樣に候、陶時を利用し御出張御布教被成下度希望に不堪候、眞宗、禪宗は多くの檀家を有し居候も宗教的感化に至りては殆どゼロに候

本年には我校より佐渡に修學旅行有之筈に付、若し機を得ば是非とも聖日蓮の遺跡をたづね度候、云々

●青森教信　統一團編輯局各位、予は雪尚ほ深き青森の地に於て新教田の開教を報導するの幸榮を有し、衷心頗る法悅歡喜に不耐候、生義客歲四月盛岡司法部の職を辭し青森林政署に轉勤已來、切に此地に眞本の播種を爲すへく營々罷在候處期なる哉、本春に至り、阿部秀三、伊保內富彌（盛岡法華等檀家）石村義和（八戶本壽寺檀家）三君の助力あり、其他四五の同志を得一月より每週土曜日迂生宅を會場として、祖典研究と本多大僧正高著法華經講義の輪講を開始致候、素より新教田始より盛大とは申し兼候へども、當青森の如く新開地にして幾階級の人を以て充たし北海と樺太の新領土を望て往返頻りなる地にありては、宗教心の涵養を要するや勿論の事にして、是非生等在住中何等かの印象を此地に與へ、顯本の教光をして長へに光輝を燦たらしむへく同志一同奮勵罷在候、宗門の諸龍象、北日本の主腦地とも申す可き此新教田の開拓を閑却せらるゝ勿らんことを、鐵道總の新造船は僅か四時間にして函館港に至るべく、南二里半にして淺虫溫泉あり、西三里にして蓮華阿闍梨の偉蹟に達す可く、八甲田山は秀麗婉雅にして碧波北に洋々、溫泉布教に、繼松布教に實に得易からざる好適地と存候、尙今春雪解を俟ち黨を組み日持聖人の靈地を探る可く準備中に有之候に付今後活動の教況は追て報導可致候敬具

（盛岡顯正會青森支部に於て　中村謙藏通信）

●三田村師の晋山　金澤市本長寺住職僧都三田義俊師は、二月二十三日遠州見附町玄妙寺へ榮轉を命せられ仝月二十八日赴任入寺せらる、仝寺は開山什師直建の靈刹にて本宗に於ける優待寺院なれば、この入寺式の爲め吉美妙立寺牧田大僧正は特に名代として朝倉一乘師を仝寺に派遣せられ、三田村師は法弟金澤本行寺主紀野俊耀師を從へ金澤より汽車にて中泉驛に着、夫より玄妙寺總代人諸氏は師を迎へて仝寺に入寺あり、當日は恰も開山會なりければ、直に莊嚴なる法要を修せられ、終て盛なる入寺式を擧げられたりといふ

●御斷り　本號も記事輻輳の爲め、千葉縣支學林同窓會、飛山僧都晋山式、宇都宮通信、綾部佛教青年會和氣婦人會等の通信は、止むなく次號に讓れり、乞ふ之を諒せよ

教學財團基金寄附申込表（第七回）

品川支所取扱

金三百圓（初回百圓、今回二百圓增加）栃木縣鹽谷郡太田　見目　清
金十圓　岡山縣英田郡土居村（以上二件大川日教扱）福田　靜齋
金一百圓　千葉縣長生郡鶴正福寺檀家　大多和來助
金二十五圓　仝縣東金町本漸寺檀家　嘉瀨清之助
仝縣山武郡公平村本松寺檀家
金四十圓　猪野三郎右衛門　金二十圓　猪野三之助
金五圓　並木　儀助　金五圓　金坂　甚藏
金五圓　仝縣山武郡源村槙草寺住職戸村普來　檀家　猪野房吉
仝縣長生郡新治村蓮華寺信徒
金十五圓　井桁　モト　金十圓　內藤　セイ
金五圓　仝縣山武郡增總村常光寺檀家總代小川筆三郎
仝縣仝郡仝村蓮成寺檀信徒
金二十圓　加藤　萬吉　金十五圓　中村小一郎
金十圓　中村　藤江　金十圓　中村　德三
仝　田中　清一　仝　齊藤三郎左衛門
仝　高山吉次郎　仝　中村　傳司
仝　田中藤太郎　仝　中村善太郎
仝　中折　隆三　金八圓　田中　寅吉
金五圓　中村　ツネ　金五圓　關內　岩吉
仝　加藤常太郎　仝　中村源次郎
仝　中村　定吉　仝　中村金十郎
金四圓　加藤傳四郎　金三圓　中村　仁助

金三圓（即）中村幾太郎　仝　中村晋
仝　中村己之吉　仝　中村イチ
金二圓　中村佐市　金二圓　中村知一
仝　田中源一郎　仝（以下信徒）△藤己之吉
金一圓（即）渡邊清吉　金一圓（即）木村市五郎
仝　中村彌三郎　仝　中村直吉
金三十五圓（二）靜岡縣濱名郡太田妙安寺住職　石塚日緣
金十錢　仝　仝寺檀家　石田勇吉
金五十圓（即）京都市千本壽量寺檀家　石上正太郎
京都市二條寺町大慈院檀家
金一百圓　田中ハル　金二十圓　乙葉俊次郎
金二十圓　大塚善五郎　金十圓　大針房之助

教學財團基金受領表（第十五回）（京都本部取扱）

金一百圓（完）東京市駒込顯本寺檀家　杉野伊兵衛
金五十圓　福井縣丹生郡山內本行寺　檀家中
金五十圓（完）京都市千本壽量寺檀家　石上正太郎
金四圓（二）仝　仝寺住職　森義觀
金三十圓　京都市二條寺町成就院信徒　星野保子
仝市仝法光院檀家
金十圓宛（完）村岡角太郎（仝）村岡サキ　近津スタ
木綺音吉　金二圓　柴田幸太郎　金三圓　三宅元吉
金一圓宛（完）杉山藤吉　元木ハル
姫路市五軒邸妙立寺檀家（三）
金二圓　井上清吉　金二十錢宛　井上セキ　仝ハナ
岡山縣津山町本蓮寺檀家（十五回）
金二圓（二）妹尾増次郎　金二十錢宛（十五）安藤幸成
服部金五郎　宮崎賢治郎　妹尾爲吉
金三圓　千葉縣長生郡本納町道榮寺兼住　內田專學
金三圓　仝縣仝郡豐田村宗延寺代　野口治埜
仝縣市原郡姉崎町妙經寺檀家

金二十二圓（二）住職　山本日悟　金三圓宛（完）穗綺鑒
四郎　海潮重義
仝縣仝郡喜多壽福寺檀家（二）
金三圓（完）國分仙吉　金二圓宛（仝）國吉清吉　植田常
三郎　金一圓宛（完）中村慶作　横田常三　齊藤庄治
高山石松　吉澤治郎吉（一）吉澤庄藏　金七十錢宛吉
澤松藏　齊藤幸三郎　森彥太郎　金四十錢　高山松平
金三圓（二）千葉縣長生郡柴名達華寺住職
金一圓（仝）仝縣仝郡本納町眞福寺兼住

○以下納金取扱者へ注意　次に掲ぐるものは京都本部へ納金ありしも納金者の內譯なきに依り速には品川支所へ通報ありたし

金二十圓　神奈川縣小田原町妙經寺　小鹽智山扱
金八十五圓二錢五厘　愛知縣野田　法華寺檀中
金三十七圓四十錢　大阪府耳原　法華寺仝
金七十三圓　岡山縣吉ヶ原　本經寺仝
金一圓二十錢　千葉縣栗野　光本會龍扱
金二十九圓五十八錢五厘　靜岡縣松野　妙松寺檀中

○正誤　昨年二月報告中、越前妙正寺檀山本捌太夫申込金「二圓」とあるは「二圓五十錢」の誤

▲要告　本部へ上納の爲め中間取扱者の手許まで已に納金濟にして、未だ本部へ送金なき爲め、此報告表に掲載し得ざるもの有之、右は次回より中間取扱者の手に空しく抑留せらるゝものと認むるものに限りその金額を本表に豫告することゝ致すべく候間、中間取扱者に於ては速に本部に納付し、空しく抑留せらるゝ様の義無之様御注意ありたし、納金報告書は豫告の如く振替貯金用紙通信文欄に掲記し得ざるものは、送金と同時に品川支所へその內譯表を送附ありたし、さすれば別に本部へは內譯表御送附には及はず

（三法堂目印）

●木佛具 金佛具 木像子圓 大販賣

佛書表具の元祖各宗御寺院御入用品一切何にても多少に不限御注文仰付らるべし佛書は申すに不及御肖像書專門

木魚位牌卸小賣

小包條例附 郵券四錢

注意

三法堂諸品發賣目錄（正價付）

佛書佛具佛像位牌木魚其種類品有之候を以て一々記載する能はず依て特に佛書正價附發賣目錄書を作製致置候に付御入用の諸君は郵券四錢御送付被下候はゞ迅速進呈仕候此目錄御用ゐになれば寺院様方の御入用品一切の買物何程遠方でも座ながら安價にて買はれ升其の正札附の品は左の通り

●佛書表具一切●過去帳の類●大般若經●一切藏經●理趣分●位牌●太鼓●佛具金物一切●釣鐘●半鐘●木魚●拂子●曲錄●香爐●數珠 [illegible] 買物も座ながら自由自在（電話二七八三番、振替貯金番號二〇七二）

各宗御本山御用達　京都小橋三條通中島町西入
大書佛表具師　仝町小橋東入下ル

三法堂　藤田總治

三法堂陳列所

明治四十一年二月十五日印刷發行

發行人　井村徧也
編輯人　山根日東
印刷人　鈴木日雄
印刷所　北澤活版所

東京府荏原郡品川町大字南品川宿四百十二番地
發行所　統一團（振替貯金番號一三一九）

轉住　遠江國見附町玄妙寺住職　三田村義俊

廣告

豫普通科學生ヲ募集ス

志願者中三名ヲ補費生ニ撰拔ス志願者ハ三月卅一日迄ニ登林スベシ

三月十五日

顯法華宗　大學林

統一

第百五十八號

明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
昭和三十年三月十五日第三種郵便物認可（毎月一回）
昭和四十一年四月十五日（毎月一回十五日）發行

四十年四月号